

ネパール現地報告 10

メモ（主要なもの）

5月14日

どさんこ大泉代表とラムジュン病院へ。午前11時半到着。

病院の様子

5月12日の余震の影響で、手術室、研修センター、スタッフクォーターの壁等に亀裂がかなり見られる（建物は中身は石とドロ、その周りをセメントで固めている）。特にスタッフクォーターのいくつかは損傷が激しく、住めない状態。手術室、スタッフクォーターは早急な補修、改築が必要。職員の多くはさらなる余震を恐れ、屋外での寝泊まりが続き疲労の色が濃い。

ヴィシュヌ事務官からの要請

スクラブナース指導のための看護師を一人、また常勤シュレス医師の指導のため整形外科、また産婦人科の指導医の派遣要請があった。

ベシサハールの街自体は平常通りのようだ。

5月15日

早朝ラムジュンを発ちカトマンズへ戻る。午前10時半、カトマンズから車で約30分、キルティプル周辺ネワール族の村パンガにて、被災児童のためのアートセラピーの試みに参加（大泉代表、山本看護師、檜戸コーディネーター、日本人ボランティア2名同行）

アートセラピー

村の学校にて開催。周辺は古いレンガ造りの建物がほとんどで倒壊家屋もかなり見られる。学校の生徒も4人亡くなった。今回は10歳以上の児童を対象に実施。参加児童総名51人。

主催者で画家であるサリタ ドンゴル女史を中心に他3名の画家によるセラピー。ネパール人ボランティア数名、学校の校長先生はじめスタッフにも協力頂く。

「教える」のではなく、各子供にテーマのみ与え、あとは自由に絵を描いてもらう。約3時間半のプログラム。子供たちに笑顔が見られる。絵描きのあとはおやつ、そのあと解散。

印象

主催者サリタ女史談「絵を描く時間、子供たちは絵を描くことだけに集中できる。特に子供は地震の悪い記憶、余震の心配などから解放される時間が必要。今回のような試みで少しでもその手助けができれば。」

12日の余震により、学校の再開が29日に延びた。何もなければどうしても色々と考えてしまう。大泉代表と話し、今後も上記プログラムを支援していく方向で一致。

CWIN（ネパールでの孤児や人身売買問題に取り組む、ネパール最大級のローカルネットワーク）も9歳以下の子供を対象に、同様のプログラムをたまたま同じ日、同じ場所にて開催していた。12日の余震により、地震に慣れていないネパールの方々にさらに同様、不安が広がっている。心のケアに取り組む必要性を、各団体が認識している様子。

